

十二代沈壽官と皇室

— 十二代沈壽官関係資料を中心に —

深 港 恭 子

はじめに

平成元（一九八九）年、皇室に受け継がれてきた御物の中から、絵画や書・工芸品など約六千点が国に寄贈されたことが契機となり、平成五（一九九三）年に開館した三の丸尚蔵館が、開館三十周年を迎え、令和五（二〇二三）年一月三日、「皇居三の丸尚蔵館」としてリニューアルオープンした。これに際し、開館記念展「皇室のみやび—受け継ぐ美—」が令和六年六月まで開催されているが、そのポスター（図1）を十二代沈壽官《色絵金彩菊貼付香炉》（以下、《香炉》図1右上）が、重要文化財・海野勝珉《蘭陵王置物》、国宝・伊藤若冲《動植綵絵 南天雄鶏図》（部分）などとともに飾っている。

この十二代沈壽官の《香炉》は、「装飾性豊かで華やかな意匠から、当館（三の丸尚蔵館）の近代陶磁を代表する作品の一つとして知られてきた（括弧書は引用者）」という経緯¹により、数ある名品の中から選出されたものと思われる。

図1 皇室のみやび—受け継ぐ美—展ポスター



十二代沈壽官が明治八（一八七五）年に創業し、この作品が製作された玉光山陶器製造場は、現在も沈壽官窯として同じ場所での作業が続いており、当時の登り窯は一部改築されているものの今も使用されている。

創業以来、同じ場所での経営が継続してきたことから、沈壽官家には玉光山陶器製造場以来の経営資料が伝世している。把握できているだけで三千五百点に及ぶ資料群であるが、昨年、新たに倉庫から日記や下絵図、賞状などの入った茶箱が発見され、当館に寄託されることとなった。その整理の過程で、戦前までの資料数百点の中に、十二代沈壽官の製作活動や受賞歴を示す資料とともに、先に述べた皇居三の丸尚蔵館が所蔵する《香炉》の製作経緯に関わる書類が含まれていることがわかった。そこで本稿では、それらの資料から十二代沈壽官に関わるものを抽出し目録として紹介するとともに、十二代沈壽官の経歴と、献上品や買い上げ品などの製作を通じた皇室との関わりについて述べていくこととする。

一 十二代沈壽官関係資料

（一）十二代沈壽官関係資料目録

今回、十二代沈壽官（以下、沈壽官と記す）関係資料として抽出したのは七十六点である。資料ごとに番号を付して目録（59～60頁）としてまとめ、一部を除き図版を掲載した。目録は、①下絵図（番号1～9）、②表彰状・博覧会等での賞状類（番号10～39）、③経営・製造に関する記録類（番号40～47）、④皇室に関連する記録（番号48～66）、⑤履歴書類（番号67～74）、⑥藩政期の記録（番号75～76）に分類できる。番号36～38は十三代沈壽官のものであるが、沈壽官の下で窯場を支えた職工らが発見していることを踏まえ、目録に加

えた。

(二) 十二代沈壽官関係資料の概要

次に、沈壽官関係資料の概要を、①下絵図、②表彰状・博覧会等での賞状類、③経営・製造に関する記録類、④皇室に関連する記録、⑤履歴書類、⑥藩政期の記録の分類に従い、以下に述べる。

①下絵図(番号1~9)は彩色画と墨画があり、原寸大と思われる絵図を掛幅に仕立てたもの(番号1・6~9)と、数種類の小型絵図を貼り交ぜて掛幅装としたもの(番号2~5)がある。

「牡丹文大花瓶下絵図」(番号1)は彩色下絵図であるが、本図がもととなった作品《錦手牡丹文花瓶》が、当館に所蔵されている(図2)。絵図には「惣高サ臺迄テ参尺」とあり、現存作品と形状、サイズともにほぼ一致する。色彩と意匠の細部に若干の変更が認められるものの、胴の牡丹蝶図、そして口縁、肩、腰の割文様に至るまで、下絵図に従って仕上げられている。花瓶には、「薩摩壽官製」・「周運筆」の銘があることから、玉光山陶器製造場における画工方の筆頭であった森山周運(「星帳」(番号44)、図版参照)が下絵図をもとに絵付けを手掛けたことがわかる。

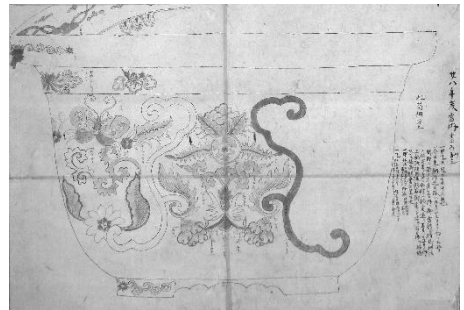
「朝顔形植木鉢・木瓜形植木鉢・盆栽鉢下絵図」(番号2)に貼り込まれた2種の植木鉢は、「陶器調製書」(番号55)の第二号、第三号に該当し、宮内省内匠寮土木課が買い上げた植木鉢の下絵図と考えられる。「植木鉢下絵図」(番号

図2 錦手牡丹文花瓶(黎明館蔵)



3)のうち、中段の図(「甲」朱書き)と下段の図(「乙」朱書き)については、沈壽官家蔵「植木鉢彩色下絵図」(図3)と一致しており、そこに「廿八年度宮内省ウツ

図3 植木鉢彩色下絵図(沈壽官家蔵)



「瓶掛・花瓶・香炉下絵図」(番号5)については詳細がはっきりしないが、右上の瓶掛(鉄瓶をかける火鉢)図に「小松ノ宮様へ瓶掛ヲ上納ニ相成候浮キ上ケノ通り菊桐ノ浮(「上」脱力)ゲト同シ(括弧書は引用者)」とあり、右下の香炉図に「代六圓也、宮内省堤様方」とあることから、これらは宮内省への上納に関連したものである。

「下絵図」(番号6~8)には、「横浜弁天通四丁目 高城商店」の朱印が押されている。沈壽官家に同じ印が押された同種の下絵図が数種伝わっており、高城商店で整えられ、沈壽官に注文用として送られた下絵図と考えられる。「龍耳大花瓶下絵図」(番号6)は沈壽官家に作品が現存する(図4)。

②表彰状・博覧会等での賞状類(番号10~39)は、明治十四年から大正十一

シ、「十二月十五日ノ内ニ上納済相成様」とあることから、明治二十八(一八九五)年十二月十五日内に宮内省に上納された甲・乙の植木鉢の下絵図であると推測される。

「香炉・置物・花瓶下絵図」(番号4)には数種の下絵図が貼り込まれているが、そのうち上から二番目の「第参號置物 高サ壹尺壹寸」とある墨画は、明治二十五年九月二十八日に宮内省調度局に花瓶・香炉とともに納品された「置物」に相当すると推測される。

図4 白薩摩昇龍浮上大花瓶(沈壽官家蔵)高さ 122.0 cm



(一九二二)年までに沈壽官が国内外の博覧会や共進会に出品し受賞した際に贈呈された褒賞授与証(番号10・38)及び任命書(番号39)である。沈壽官の受賞歴は、これまで主催者が発行した出品目録や受賞者人名録及び沈壽官家に伝来する履歴書の記載等を基に考察されてきたが、その内容を裏付ける一次史料に位置づけられる。

特に重要なものとして、内国勸業博覧会の賞状、第二回(番号10)、第三回(番号12)、第四回(番号14・15)、第五回(番号30)がまず挙げられる。内国勸業博覧会は、万博での日本製品の好評を受けて、内務卿大久保利通の提案により、内務省が主催し殖産興業を目的に開催した博覧会で、西南戦争のために鹿児島県が全国で唯一出品できなかった第一回を除き、沈壽官はすべての回で受賞した。県内の受賞者は他にも数人いるものの、管見の範囲では、陶磁器の受賞者で賞状が現存するのは沈壽官のみである。

同様の目的で農商務卿西郷従道が代表を務めた、明治十八年の繭絲織物陶漆器共進会では、出品者に加え各産地の功労者も褒賞の対象となったが、薩摩焼では、沈壽官と龍門司焼の川原源助、青木宗兵衛が功労賞を受賞し、さらに薩摩焼の創始に関わった芳仲、朴平意、慶応三(一八六七)年のパリ万博出品作を製作した朴正官にも追賞が授与された³⁾。沈壽官は功労賞(授与証が沈壽官家に伝来)に加え、薩摩焼の出品者の中で最も上位の四等賞(番号11)を受賞するとともに、全国から二十六名の陶業者が東京に集められ、明治十四年を頂点に、その後大きく減少していた海外輸出の打開策を協議した陶器集談会にも、鹿児島県を代表して出席した。

③経営・製造に関する記録類(番号40・47)には、明治十三年(番号40)、明治十四年(番号41)、明治十八年(番号42)、明治二十五年(番号43)の沈壽官の日記が含まれる。日ごとの箇条書きで、主な記載内容は職工の出勤に関する記述であるが、窯場の動きも把握できる。「陶器各種値段調(番号46)は、当時取引のあった東京や横浜、京都など県外業者への売渡価格をまとめたもの

である。「白陶器工業締約」⁴⁾を結んだ同業者である東郷壽勝・鮫島訓石・奥原玄市と連名で、県外への製品の売渡価格を値上げする旨を記した書簡の草稿が含まれ、苗代川産地で商品価格を統一するという、組合活動がうかがえる。

「金地金泥箔買入本立簿(番号47)は、明治二十七年の一年間に使用した金彩原料の記録である。買入品として、解き箔・京都箔・東京箔・内箔・別打箔・無類別打箔・無類純金・純金・玉金・砂金・是迄カス・硝酸・エンサン・銅カネが認められる。明治時代は、純度が低い水金が海外からもたらされた先進技術としてもはやされたが、沈壽官は江戸時代以来の薩摩焼の伝統である、純質の金泥にこだわったことが知られている⁵⁾。本史料に記された硝酸や塩酸は、沈壽官が自身の窯場で金液の製造を行っていたことを示している。

④皇室に関連する記録(番号48・66)のうち、「北白川宮殿下(能久親王)・妃殿下行幸等記録貼交掛幅(番号48)は、明治二十六年、沈壽官家が北白川宮殿下・妃殿下の御休息所となった際の記録及び明治二十八年に同家が東園侍従の御休息所となった際の記録を掛幅に仕立てたもので、下部には二通の御札状が貼り込まれている。「皇室へ献上・売渡品製作実績書上(番号49)は、明治十四年から同三十年の間における島津家から皇室への献上品や宮内省買上品の製作等を沈壽官がまとめたものである。「宮内省御注文延期願留」ほか(番号50・66)は、宮内省の買い上げに係る書簡や届け出の控え等が含まれており、調度局及び土木課とのやり取りがみられる。

⑤「履歴書類(番号67・74)は、受賞歴を端的にまとめたものと、授与証の内容まで記載された詳細なもの、さらに薩摩焼の沿革や玉光山陶器製造場の創業の経緯にも言及したものがあ

る。⑥「藩政期の記録(番号75・76)は、薩摩藩が殖産振興を目的に苗代川で実施した磁器生産に関わるものである。「御仕建松山根帳(番号75)は、表紙に「嘉永三年戊二月改」、苗代川肥前傳焼物所」とあり、「苗代川肥前傳焼物所部一山目録写(番号76)は、表紙に「慶應元年丑六月踏付改」、市来所々山

床八ヶ所 検者方」とある。いずれも、肥前伝焼物所における薪の調達についての記録であるが、沈壽官家にはこれらの他にも藩営の焼物所の記録がいくつか伝わっている。これらが明治期に創業した沈壽官家に伝来している理由は定かでないが、前述の履歴書類によれば、沈壽官が「御内用方」の職工であったことと関わりがあるのではないかと考えている。

ここで、苗代川における藩営の陶磁器生産体制に触れておく。弘化三（一八四六）年、調所広郷が行った財政改革の一環として、磁器窯が築造された。「苗代川焼物所」の中に、陶器生産部門の「高麗伝焼物所」に加え、新たに磁器生産部門の「肥前伝焼物所」が置かれ、内用方が運営した⁶。沈壽官はその職工であった。明治時代に入り、県主宰の苗代川陶器会社に転換すると、沈壽官は工場を務めたこと、現在の沈壽官窯の所在地が苗代川陶器会社の道路向かいに位置すること、同社の瓦解に際して職工の一部が、沈壽官が創業した窯場に吸収されたことなどの経緯から、藩政期の記録が沈壽官のもとに伝来することになったのではなからうか。

二十二代沈壽官について

(一) 二十二代沈壽官の経歴

慶応三（一八六七）年のパリ万博での好評をきっかけに、幕末から明治期、華麗な絵付けを施した白色陶器の白薩摩、いわゆる薩摩錦手は欧米で絶大な人気

表1 沈壽官受賞歴

年代	西暦	名称	出品物・審査評	番号
M14	1881	第二回内国勲業博覧会(褒状)	置物「遊船楽ヲ奏シ寶船福神ヲ載ス、此ノ二個ノ置物意匠少シク殊ナルガ如シト雖トモ船體及ヒ船首ノ竜鳳佳巧ニシテ焼成完全ナリ、老熟ノ技ヲ觀ルニ足レ顔ル嘉ス」	10
M18	1885	繭絲織物陶漆器共進会(四等賞)	陶器 袋形茶具	11
M18	1885	繭絲織物陶漆器共進会(功労賞)		沈家
M23	1890	第三回内国勲業博覧会(二等有功賞)	向附皿 菊花式、花瓶 薄端「甲ハ工作鄭重ニシテ使用ニ適シ、乙ハ製形至難ナルモ苔籬ノ弊ナシ、共ニ熟手ニ非サレハ此ニ到リ難シ、其有功甚々嘉賞ス可シ」	12
M24	1891	美術展覧会(褒状一等)	薩摩焼鳥籠形香炉「彫透織巧ニシテ磁質モ亦佳ナリトス」	13
M26	1893	シカゴ万国博覧会		沈家
M28	1895	第四回内国勲業博覧会(妙技三等)	陶器竹籠式花瓶「工手善ク熟シテ彫刻精緻、編竹ノ整齊真ニ逼テ清雅ナリ」	14
M28	1895	第四回内国勲業博覧会(褒状)	陶器花瓶	15
M30	1897	連合共進会(二等褒賞)	浮彫花瓶 白地	16
M30	1897	創設廿五年紀念博覧会(有功銀牌)	陶製香爐	17
M30	1897	創設廿五年紀念博覧会(出品紀念)	陶磁器	18
M30	1897	第一回鹿兒島管内米外八品品評会(一等賞)	花瓶	19
M31	1898	美術展覧会(二等賞銀牌)	薩摩陶浮彫花餅 大瓶一雙、小瓶一雙「俱ニ精細ノ彫鑿ヲ施ス、日子ヲ惜マシテ此製作アリ、慣熟ノ技ヲ觀ル」	20
M33	1900	第5回パリ万国博覧会(銅牌)		沈家
M33	1900	鹿兒島重要物産品評会(一等賞)	陶磁器	21
M34	1901	緑綬褒章 日本帝國褒章之記		沈家
M34	1901	連合共進会(二等褒賞)	籠形置物	22
M34	1901	第一回全国窯業共進会(二等賞銀牌)	陶製古銅紋彫刻花瓶	23
M34	1901	第十六回協技会(三等賞銅牌)	陶白地透彫香爐	24
M34	1901	五二会臨時品評会(三等賞銅牌)	筒形香爐	25
M35	1902	ハノイ東洋諸國博覧会(一等賞金牌)		沈家
M35	1902	第二回全国製産品博覧会(名譽牌)	審査囑託における尽力に対する感謝状	26
M35	1902	第二回全國製産品博覧會 宮内省御買上ケ(薩摩焼香炉)	薩摩焼香炉「右ハ本會ニ御出品ノ處、今般 宮内省へ買上ケ相成候條、此段及御通知候也」	27
M35	1902	第十七回競技会(褒状一等)	薩摩焼浮彫花瓶	28
M35	1902	美術展覧会(三等賞銅牌)	薩摩焼浮彫花瓶	29
M36	1903	第五回内国勲業博覧会(三等賞牌)	陶器各種	30
M37	1904	セントルイス万国博覧会(銀牌)		沈家
M37	1904	第三回全国製産品博覧会(三等賞有功銅牌)	陶器各種	31
M37	1904	内国製産品評会(三等賞牌)	陶器各種	32
M37	1904	戦時紀念五二会品評会(三等賞)	薩摩焼陶器各種	33
M38	1905	戦時紀念博覧会(二等賞 有功銀牌)	薩摩焼各種	34
M38	1906	第十二回九州沖繩八県連合共進会(一等賞金牌)	菓子器	35

※番号の欄の数字は目録番号、「沈家」とあるものは、沈壽官家所蔵

を誇った。明治六（一八七三）年のウィーン万博にあたり、鹿兒島県に赴任していた医師ウィリアム・ウイリスは「薩摩焼は来るウィーン万博でも大量に出品される予定であり、日本の中で最高級品とみなされている」と記しており、万博を前に薩摩焼の評価は極めて高く、多数の製品が出品されたことがうかがえる。万博会場では沈壽官の手になる錦手大花瓶が多大な賞賛を受け、薩摩錦手の国際商品としての評価は決定的となったと言われ、これ以降、沈壽官は県内の薩摩焼生産を牽引し続けた。

ここで、明治三十六年にまとめられた履歴書（番号72）に基づきながら、目録に含まれる履歴書類をもとに、改めて沈壽官の経歴に触れたい⁸。

沈壽官は、天保六（一八三五）年、薩摩焼を創始した朝鮮人陶工らの末裔として苗代川（現在の日置市東市来町美山）に生まれた。弘化二（一八四五）年に

図5 第二回内国勸業博覧会 沈壽官 鳳凰形置物 遊船楽奏・宝船福神



続いて沈壽官が受賞した際の出品物に着目して、その製作を見ていこう。表1のうち審査評をみていくと、明治十四（一八八二）年の第二回内国博覧会では、置物について「遊船楽ヲ奏シ寶船福神ヲ載ス、此ノ二個ノ置物意匠少シク疎ナルガ如シト雖トモ船體及ヒ船首ノ竜鳳佳巧ニシテ焼成完全ナリ」とある。これらの二点のうち船首に鳳凰をかたどった作品が図5であり、精緻な彫刻を施した作

(二) 十二代沈壽官の製作

国内に競合する陶磁器産地が多数ある中、鹿児島県の苗代川に所在し、こうした功績を残し続けることは容易なことではなかっただろうが、創業後、大型製品の安定的な生産、画彩窯の改良や透彫・浮彫といった彫刻技法の開発など次々と技術革新を進め、東京に支店を開いて海外輸出も積極的に行う一方、国内の産地に白薩摩の素地提供も行うなどして経営的にも発展を遂げていった。

藩宮の苗代川焼物所の工人となり、安政四（一八五七）年には工長となり、文久元（一八六一）年からは横目役も兼務した。明治四年、苗代川陶器会社の工長となるが、同社が破産解社となったため、私費を投じて玉光山陶器製造場を建設した。現在まで続く沈壽官窯が創業したのである。

その後の功績については、目録中の②表彰状・博覧会等での賞状類（番号10〜35）にあるとおりである。表1は、②に沈壽官家に伝来する賞状類の情報を加えて表にまとめたものである。ウイーン万博を経て、明治十四年から亡くなる明治三十九年までに、万博で四回、国内博覧会で二十回、九州県内で一回、鹿児島県内で二回の受賞実績がある。この間、明治三十四年には、緑綬褒章を受章した。

品であることがうかがえる。このほか、明治二十八年の第四回内国博覧会三等妙技賞を受賞した作品は、「工手善ク熟シテ彫刻精緻、編竹ノ整齊真ニ逼テ清雅ナリ」、明治三十一年美術展覧会で二等賞銀杯を受賞した「薩摩陶浮彫花瓶」ほかは、「俱ニ精細ノ彫鏤ヲ施ス、日子ヲ惜マスシテ此製作アリ」とあって、彫刻技に対する評価が特筆されている。このほか、具体的な作品の名称が記された出品物についても、「籠形置物」、「陶製古銅紋彫刻花瓶」、「陶白地透彫香爐」、「薩摩焼浮彫花瓶」とあるように、竹籠形や透彫、浮彫を施した彫刻技を駆使した作品を出品し、評価を受けている。

明治期の薩摩焼は薩摩錦手に象徴される華麗な絵付けのイメージが強く、沈壽官が用いた「薩摩壽官製」銘のある作品も、端正で緻密な上絵付けが特徴的である。しかしながら、表1からは、沈壽官が博覧会等に積極的な出品し、また受賞という形で評価を受けたのは、自身が発明した透彫・浮彫、そして彫刻技を駆使した置物等であり、これらの造形に調和する上絵付けが施されたということができよう。必ずしも上絵付けを必要とせず、白薩摩の素地の美しさと精緻な彫刻文様からなる荘重な作風も、沈壽官を特徴づけているといえよう。

(三) 弟壽誠・次弟豊壽

ところで、沈壽官の名は広く知られているものの、彼の製陶業を支えた弟たちの存在はあまり知られていない。沈壽官には、壽誠、豊壽、當近という三人の弟がいた。ここでは、東京支店の責任者として海外向け製品の絵付けや商品販売の役目を担った、弟沈壽誠、次弟河野豊壽（朴豊壽）についてみていこう。

沈壽官が明治八（一八七五）年に玉光山陶器製造場を創業すると、明治十一年に壽誠が上京、二年後には東京支店を開業した。壽誠に関しては、沈壽官家に伝わる「沈壽誠東京画工場及び審査請求主眼留」に略歴が記されている。

壽誠は、明治五年から兄壽官に従って陶器画彩をはじめ、同十一年に上京し、東京で有名画工のもとを転々として画業を修業した。明治十三年に開業した支

店は京橋区竹川町にあったが、同十六年からは京橋区銀座二丁目に移転、そして同十八年に至って芝区田町四丁目十八番地に土地と家を買求めて画工場を建設し東京支店とした。明治二十三年の第三回内国博には壽誠の名で出品その際の芝区田町の居住地として、本宅は居宅本場（間口四間・奥行五間）二階付、附属建物二棟内一棟（間口一間・奥行二間等）二階付とある。

東京支店を構えたことで外商との直接取引が可能となっており、その役割は大きかったと思われる。苗代川の窯場から相当量の白素地が壽誠のもとに送り出されているとともに、沈壽官自身もたびたび滞在しており、東京支店は沈壽官にとっても重要な拠点となっていたことがうかがえる¹⁰⁾。

しかし、明治二十四年を境に沈壽官家資料において壽誠の名を確認することができなくなる。現段階では推測の域を出ないが、この頃没したのではあるまいか。かわって、東京支店の住所に河野豊壽の名が現れる。

豊壽は嘉永五（一八五二）年、壽官・壽誠の弟として生まれた（番号59）。慶応三（一八六七）年には英式訓練を受け、翌年の戊辰戦争に鹿児島兵外城四番隊として従軍、上京して禁闕守衛に続き北越まで出陣のち帰郷している。明治十二年の段階では沈壽官と同居しているが、その後、朴雲益の養子となっており、同十三年九月には朴豊壽と名乗っている。明治二十四年に鹿児島市の士族河野通故の養子となり、河野豊壽と改姓しているが、この後上京して、東京支店を任されたと推測される。東京の島津家袖ヶ崎邸や皇室とのやりとりは、東京支店が窓口となっており、明治十四年、天皇が袖ヶ崎邸を行幸した折の島津家からの献上品、皇室の買い上げ品などの窓口も東京支店が務めている¹¹⁾。

三 皇室と十二代沈壽官

「宮内省御注文延期願留」（番号50）は、冒頭で示した、皇居三の丸尚蔵館に所蔵されている沈壽官作《色絵金彩菊貼付香炉》（以下、《香炉》と記す）及

図6 《色絵金彩菊貼付香炉》・《色絵金彩菊貼付花瓶》 皇居三の丸尚蔵館収蔵



う延期願、さらに七月二十日付で申請された九月三十一日まで納品の延期を願う再延期願は、調度局に提出された書類の控えとみられる。

調度局に残る明治二十五年十二月十九日付の「調製書」によれば、《香炉》と《花瓶》一対に加えて、同時に置物が製作されており、そこには、「第参號 置物 壹個 高サ壹尺壹寸 但シ唐子遊ヒ橋渡之圖人物車橋供古代錦模様 代金百七拾五圓」とあるという¹²⁾。この作品は三の丸尚蔵館には伝存していないようであるが、その下絵図に相当すると思われる図が、「香炉・置物・花瓶下絵図」（番号4）に貼り込まれた下絵図のうち、上から二番目の絵図である。右上に

び《色絵金彩菊貼付花瓶》一対（以下、《花瓶》一対と記す）からなる一組の作品（図6）に関連する史料である。この作品については、明治二十六（一八九三）年一月十二日付で沈壽官から調度局長山崎直胤（省吾）宛てに製作の契約書が提出されており、香炉二個と花瓶二対の製作を合計四百六十円で請け負い、九月二十八日に納品されたことがわかつている。本来、二セツトであったのである。ただし、当初の納品日は五月三十一日であったものの、沈壽官から二度の延期願が提出された結果であった¹³⁾。「宮内省御注文延期願留」（番号50）に含まれる、五月十五日付で申請された七月三十一日まで納品の延期を願

表2 皇室への献上・売渡品製作実績

和暦	西暦	事項	番号
M14	1881	島津家袖ヶ崎邸へ天皇陛下の臨幸があった際、島津家より「御花生五対(桐二鳳凰麒麟浮上ケ錦画付)、御香炉五個(桐二鳳凰麒麟浮上ケ錦画付、その他数品を献上するにあたり作品を製造	
M18	1885	御用品として、丈六尺(高さ180cm)の大壺一対(蓋獅子撮み薩摩固有ノ錦画菊ノ御紋付の製造を命じられ、買い上げられる	
M21	1898	島津忠義が玉光山陶器製造場を訪問。陶器窯・製造場を視察し、数点買上げ	
M26.12	1892	薩摩焼鳥籠外二品を長崎宮内大臣秘書官を経て御伝献を願ったところ、宮内省御用品として「菊花浮彫籠目彫刻錦手画付花生二対」、「香炉二個」の製造を命じられる。代金四百六十円で買い上げとなる	4, 51 50-① 50-② 50-③
M26.8	1893	北白川宮殿下・妃殿下来県の際、休憩所として陶器製造場をご覧になる。製造・焼方などについて質問があり、人物置物その外数品を買上げ。大香炉・抹茶碗等を注文される	
M27	1894	宮内省内匠寮より植木鉢製造の御用を命じられる	55 56
M28	1895	宮内省より大植木鉢製造の御用を命じられる	57
M28.9	1895	東園侍従が鹿児島県に出張の際、昼食休憩所として陶器製造場をご覧になる	48
M30	1897	宮内省よりお手元御用として高さ一尺の袋形人物浮上ゲサヤ形彫刻錦画彩色付一対の製造を命じられ、金百五十円で買上げとなる。 M317月29日 袋形浮彫花瓶一対 布袋二唐子浮上惣体サヤ形白地浮彫付 代金150円 M312月調製を仰せ付けられ、7月31日までに上納の契約であったが、9月30日まで延期をお願いしたい件を伝える手紙写	50-④ 50-⑤ 51 65
M31.12	1897	皇后宮職御用植木鉢及び一輪花生製造御用を命じられる	
M31.12	1898	浮彫花瓶製作代金申出書 二十八円五十銭	66

※番号の欄の数字は、目録番号を示す。

「第参號 置物 高サ壹尺寸」とあり、調製書の記載と一致している。また、下絵図の図案には、調製書にある「唐子遊ビ橋渡之圖」に相応しい人物・車・橋があるという点も一致する。下絵図にあるモチーフに「古代錦模様」の上絵付けが施された置物が、「花瓶」一対・「香炉」と合わせて製作された可能性が高い。

ところで、図6の《花瓶》一対にはそれぞれ「薩摩壽官製」の金彩銘と、彫銘で「森田徳二郎作」とある。彫銘は、森田が細工師であったことをうかがわせる。この人物について、三の丸尚蔵館の岡本氏から問い合わせを受けたのであるが、二〇一八年当時は沈壽官周辺に該当する人物は見当たらなかった。しかしながら、今回新たに発見された明治二十五年の「星帳」(番号44)の細工方の職工に「森田徳次郎」の名が見える。「星帳」とは出勤簿のことであるが、この年の森田の勤務状況を見ると、一年間で三四三日の出勤、延べ三七七・八

六人分の勤勞となっており、細工方として多くの製作に携わっていた様子がかがえる。「調製書」が記された年に細工師として沈壽官のもとで活躍していた「森田徳次郎」が、《花瓶》の製作を手掛けたその人であるとみてまちがいあるまい。

この他にも、沈壽官は表2のとおり、幾度も皇室への献上や買い上げ品の製作を手掛けた。これらに関連する記録(番号48〜66)の中には、宮内省土木課を窓口とした植木鉢や盆栽鉢の買い上げ記録が複数含まれている。番号55は、明治二十六年三月十七日付の植木鉢の「陶器調製書」である。書き込みが多いため草稿と思われるが、「第壹號」から「第参號」まで三種に関する詳細な記載がある。このうち、「第貳號木瓜形植木鉢」「第参號朝□形植木鉢」に該当する下絵図が番号2(上段・中段)に含まれる。表2は、沈壽官がまとめた「皇室へ献上・売渡品製作実績書上」(番号44)などの内容をまとめたものであるが、明治二十七年に植木鉢、明治二十八年に大植木鉢、明治三十一年にも植木鉢を売り渡したとあり、番号2の下絵図はいずれかに該当することが予想される。

表2によれば、献上や買い上げなどを通して、沈壽官の作品が皇室に献上・買い上げられた機会は十回に上る。その数の多さは、国内外の博覧会などでの多数の受賞を反映したものとみえよう。

おわりに

はじめに触れたが、沈壽官家にはほかに三千五百点を超える経営資料が伝来している。鹿児島県において、明治時代に海外輸出や博覧会等で活躍した窯元の経営記録の存在は沈壽官家の他に知られておらず、また全国的にみても、明治時代の窯元の経営記録が失われずに一括資料として伝来した稀有な例である。今回は、当館に寄託される予定の資料を中心に述べたが、沈壽官家に伝来している資料を含めて、経営の実態を明らかにしていくことは、明治期を中心

とした日本における輸出産業の生産や流通の実態をうかがう上でも、世界に名を馳せた薩摩焼の実態を明らかにしていく上でも重要な意味を持つ。現在明らかになっている近代薩摩焼の歴史は、国内外の博覧会での受賞や出品目録、統計書等からの全体としての生産量等のみに限られていることから、沈壽官家文書の存在はたいへん有益であると考えられる。その検討により浮かび上がった沈壽官窯の生産や流通の実態などを通して、近代薩摩焼の姿もまた立体的に現れてくることが期待される。

今回、十二代沈壽官と皇室の関わりについて、沈壽官家に伝わる資料を基に、皇室に伝わった作品やその研究を参照しながら考察することにより、その一端を明らかにできたと考えている。今後、さらに両者の資料などを比較しながら検討することで、より実証的な関わりが明らかになっていくであろう。

なお、藩宮の苗代川焼物に関する資料も、近年研究が進展してきた幕末期の殖産振興事業としての苗代川における磁器生産の実態を明らかにする上で貴重である。資料群の整理が進み、研究が進展していくことが望まれる。

註

- (1) 岡本隆志「十二代沈壽官《色絵金彩菊貼付花瓶》・《色絵金彩菊貼付香炉》について」宮内庁三の丸尚蔵館編『三の丸尚蔵館年報・紀要』二十三号、宮内庁、二〇一八年、紀要篇二五頁
- (2) 前掲註1 二八頁「一第参號 置物 壹個 高サ壹尺壹寸 但シ唐子遊ビ橋渡之圖人物車橋供古代錦模様 代金百七拾五圓」とある。
- (3) 「主な国内博覧会等出品一覧」黎明館編『薩摩焼資料集 華麗なる薩摩焼の近代』明治維新一五〇周年記念黎明館企画特別展「華麗なる薩摩焼」実行委員会、二〇一九、五〇～五三頁
- (4) 前掲註3 「苗代川の製陶関係者―沈壽官家文書を通して―」、四六頁

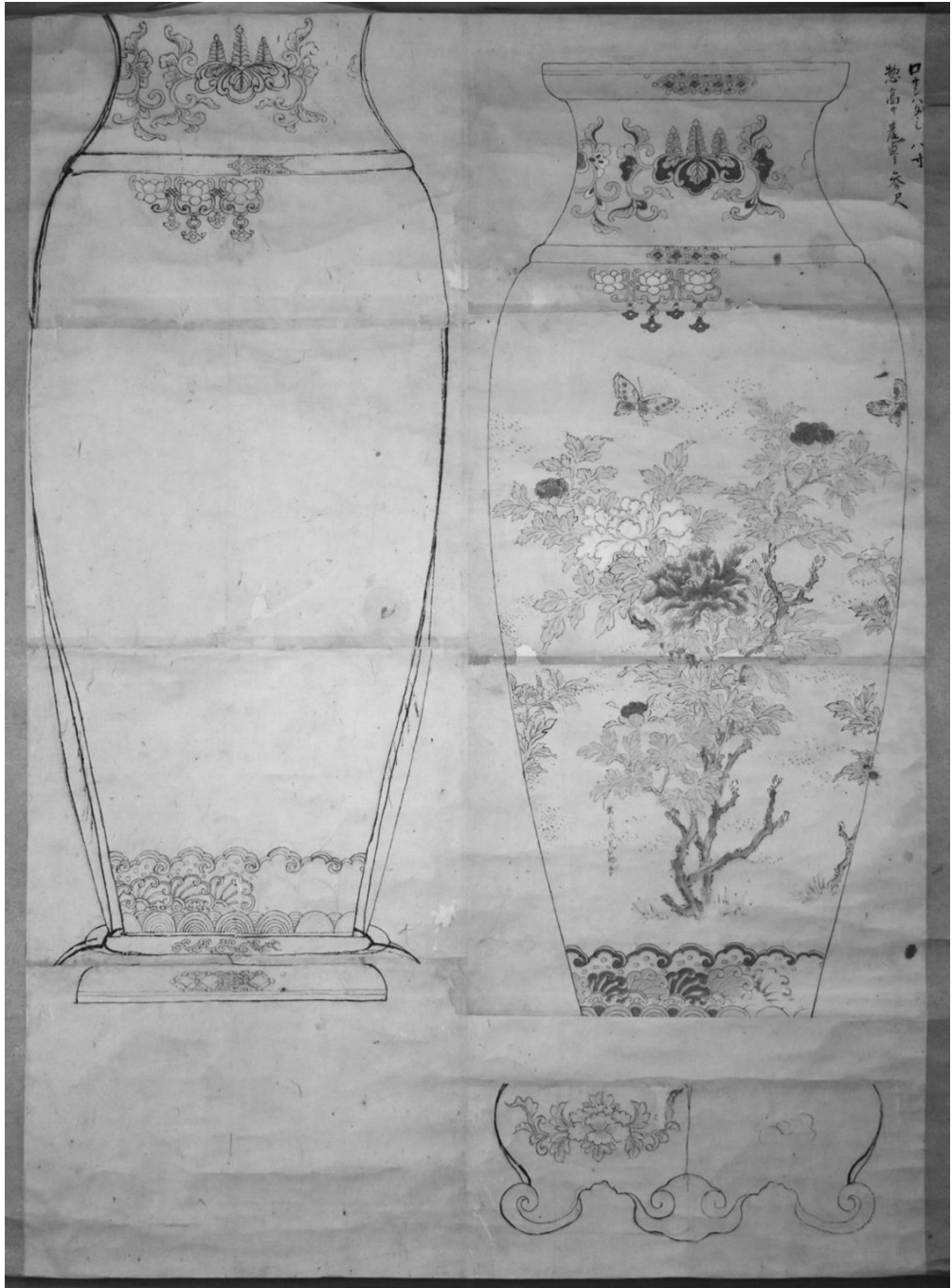
- (5) 拙稿「薩摩焼の歴史と沈壽官窯―白薩摩の系譜」展覧会図録、パリ・三越エトワール帰国記念『薩摩焼 桃山から現代へ 歴代沈壽官展』朝日新聞社・歴代沈壽官展実行委員会、二〇一一年
- (6) 「苗代川文書所役日記一・二」『日本庶民生活史料集成』十巻 三一書房 一九七〇年、七二九頁「苗代川の儀近年相勞候付、御内用計を以御取救被仰付候」とある。
- (7) 大山瑞代訳、吉良芳恵解説『幕末維新を駆け抜けた英国人医師―甦る「ウイリアム・ウイリス文書」―』創泉堂出版、二〇〇三年
- (8) 前掲註5 深港恭子編「薩摩焼年表―苗代川系・沈壽官家を中心に」／拙稿「窯業産地としての苗代川の形成と展開―薩摩焼生産の歴史―久留島浩・須田努・趙景達編『薩摩・朝鮮陶工村の四百年』岩波書店、二〇一四年／前掲註1・3ほかに、沈壽官の経歴についての記載がある。
- (9) 前掲註5
- (10) 前掲註5
- (11) 拙稿「島津忠義が皇太子ニコライに贈った薩摩焼について―十二代沈壽官作 錦手花卉図花瓶・錦手四君子図茶壺形蓋付壺―『国華』二五二八号、二二八編、第七冊、二〇二三年
- (12) 前掲註1、図6《花瓶》 一對 右 高さ四一・三、胴径(短径) 一五・二、(長径) 二四・七、左 高さ四〇・五、胴径(短径) 一六・二、(長径) 二三・九、《香炉》中 総高三七・八、本体胴径(短径) 一五・一、(長径) 二二・七
- (13) 宮内省調度局の記録は、前掲註1の岡本論文を参考にした。
- (14) 前掲註1、
- (15) 深港恭子・渡辺芳郎「幕末苗代川における磁器生産―御内用方萬留一番」の検討から―『東洋陶磁』四五、東洋陶磁学会、二〇一六年ほか

(ふかみなと きょうこ) 本館学芸課主任学芸専門員

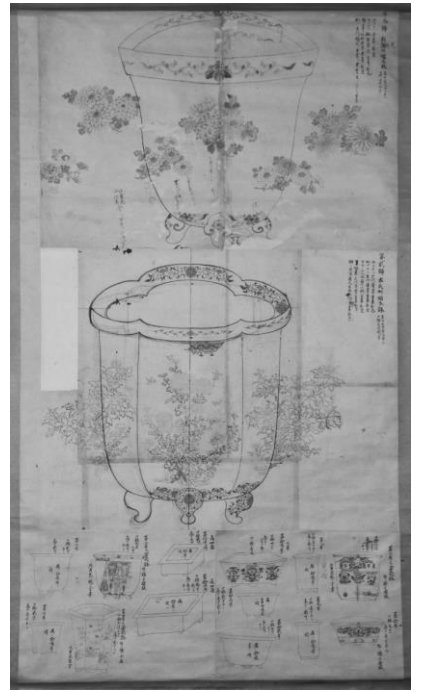
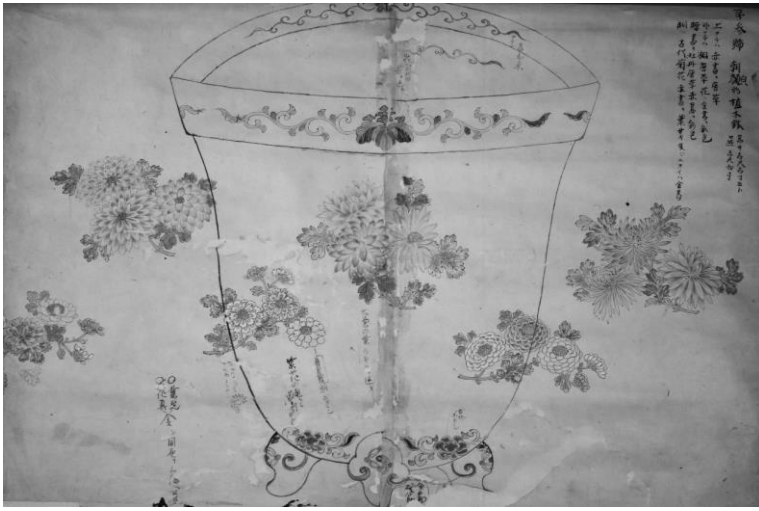
資料目録

番号	名称	宛所	制作者	年代	西暦	形質	法量(cm)	備考
1	牡丹文大花瓶下絵図					掛幅 紙本・彩色	縦98.2 横70.0	作品現存(黎明館所蔵)
2	朝顔形植木鉢・木瓜形植木鉢・盆栽鉢下絵図			明治26年	1893	掛幅 紙本・彩色	縦117.0 横66.5	番号55「陶器調製書」に該当あり
3	植木鉢下絵図			明治28年	1895	掛幅 紙本・彩色	縦109.0 横50.5	沈壽官家蔵「彩色植木鉢下絵図」と同じ下絵図(甲(中段)・乙(下段)を含む)
4	香炉・置物・花瓶下絵図			明治25年	1892	掛幅 紙本・彩色	縦159.0 横51.3	中段「第参號 置物 高サ壹尺壹寸
5	瓶掛・花瓶・香炉下絵図					掛幅 紙本・彩色	縦72.4 横61.8	香炉(右下)に、「代六圓也、宮内省堤様方」
6	龍耳大花瓶下絵図					掛幅 紙本・墨	縦133.0 横75.3	「横浜弁天通四丁目 高城商店」朱印。作品現存(沈壽官家蔵)
7	広口大花瓶下絵図					掛幅 紙本・墨	縦90.7 横68.5	「横浜弁天通四丁目 高城商店」朱印
8	瓶子形大花瓶下絵図					掛幅 紙本・墨	縦91.0 横74.5	「横浜弁天通四丁目 高城商店」朱印
9	菊紋旭日鶴図花瓶下絵図					掛幅 紙本・墨	縦102.6 横53.3	貼り紙 縦35.5 横26.0
10	第二回内国勲業博覧会褒状	沈壽官		明治14年6月10日	1881	一紙	縦 横	「置物」
11	繭絲織物陶漆器共進会褒賞授与証(四等賞)	沈壽官		明治18年6月5日	1885	一紙	縦39.8 横53.3	「陶器 袋形茶具」
12	第三回内国勲業博覧会褒賞証(二等有功賞)	沈壽官		明治23年7月11日	1890	一紙	縦44.5 横62.8	「向附皿 菊花式、花瓶 薄端」
13	美術展覧会贈褒之証(褒状一等)	沈壽官		明治24年5月9日	1891	一紙	縦34.7 横43.8	「薩摩焼鳥籠形香炉」
14	第四回内国勲業博覧会褒賞証(妙技三等)	沈壽官		明治28年7月11日	1895	一紙	縦46.0 横63.3	「陶器竹籠式花瓶」
15	第四回内国勲業博覧会褒状(褒状)	沈壽官		明治28年7月11日	1895	一紙	縦46.0 横63.3	「陶器花瓶」
16	連合共進会褒賞授与証(二等褒賞)	沈壽官		明治30年3月18日	1897	一紙	縦37.7 横48.8	「浮彫花瓶 白地」
17	創設廿五年紀念博覧会褒賞証(有功銀牌)	沈壽官		明治30年5月16日	1894	一紙	縦41.3 横54.1	「陶製香爐」
18	創設廿五年紀念博覧会紀念状(出品紀念)	沈壽官		明治30年5月16日	1894	一紙	縦41.3 横54.1	「陶磁器」
19	第一回鹿児島県管内米外八品品評会褒賞授与証(花瓶一等賞)	沈壽官		明治30年10月31日	1894	一紙	縦31.9 横41.6	
20	美術展覧会褒賞証(二等賞銀牌)	沈壽官		明治31年5月14日	1898	一紙	縦35.0 横44.4	「自作 薩摩陶浮彫花餅 大瓶一雙、小瓶一隻」
21	鹿児島県重要物産品評会証(一等賞)	沈壽官		明治33年3月7日	1900	一紙	縦31.3 横39.0	「陶磁器」
22	連合共進会褒賞授与証(二等褒賞)	沈壽官		明治34年3月15日	1901	一紙	縦37.7 横49.3	「籠形置物」
23	第一回全国窯業品共進会褒賞(二等賞銀牌)	沈壽官		明治34年9月22日	1901	一紙	縦36.2 横50.1	「陶製古銅彫彫刻花瓶」
24	第十六回競技会褒賞贈与之証(三等賞銅牌)	沈壽官		明治34年10月20日	1901	一紙	縦41.0 横55.0	「自作 陶白地透彫香爐」
25	五二会臨時品評会褒賞証(三等賞銅牌)	沈壽官		明治34年11月1日	1901	一紙	縦37.5 横51.9	「筒形香爐」
26	第二回全国製産品博覧会謝状(名誉牌)	沈壽官		明治35年5月10日	1902	一紙	縦39.2 横54.7	審査囑託における尽力に対する感謝状
27	宮内省御買上ケ二付通知書(薩摩焼香炉)	沈壽官		明治35年5月17日	1902	一紙	縦33.0 横43.2	「一薩摩焼香炉」
28	第十七回競技会褒賞贈与之証(褒状一等)	沈壽官		明治35年9月14日	1902	一紙	縦41.0 横55.0	「自作 薩摩焼浮彫花瓶」
29	美術展覧会褒賞証(三等賞銅牌)	沈壽官		明治35年11月22日	1902	一紙	縦35.0 横44.0	「薩摩焼浮彫花瓶」
30	第五回内国勲業博覧会賞牌授与証(三等賞牌)	沈壽官		明治36年7月1日	1903	一紙	縦49.5 横63.7	「陶器各種」
31	第三回全国製産品博覧会褒賞之証(三等賞 有功銅牌)	沈壽官		明治37年5月14日	1904	一紙	縦44.8 横56.3	「陶器各種」
32	内国製産品評会賞牌授与証(三等賞牌)	沈壽官		明治37年5月22日	1904	一紙	縦48.3 横63.3	「陶器各種」
33	戦時紀念五二会品評会褒賞之証(三等賞)	沈壽官		明治37年11月8日	1904	一紙	縦39.5 横55.0	「薩摩焼陶器各種」
34	戦時紀念博覧会褒賞之証(二等賞 有功銀牌)	沈壽官		明治38年5月29日	1905	一紙	縦39.4 横33.8	「薩摩焼各種」
35	第十二回九州沖繩八県連合共進会賞牌授与証(一等賞金牌)	沈壽官		明治39年4月15日	1906	一紙	縦39.0 横51.0	「菓子器」
36	第四回鹿児島県工産品品評会褒賞授与証(一等賞)	沈壽官(十三代)		大正10年11月1日	1921	一紙	縦37.7 横51.4	「花瓶」
37	平和記念東京博覧会褒賞授与証(銀牌)	沈壽官(十三代)		大正11年7月10日	1922	一紙	縦42.3 横54.1	「陶器」
38	第五回鹿児島県工産品品評会褒賞授与証(一等賞)	沈壽官(十三代)		大正11年9月27日	1922	一紙	縦37.4 横51.6	「薩摩焼花瓶」
39	東京彫工会特別賛助会員任命書	沈壽官		明治31年5月18日	1898	一紙	縦26.0 横34.5	
40	日記帳(明治13年正月元日～6月6日)	沈壽官		明治13年	1880	和綴 38丁	縦28.8 横21.0	表紙「明治十三年辰一月吉日 日記帳 藤尾陶器製造 沈壽官」、
41	日誌(明治14年1月～8月16日)	沈壽官		明治14年	1881	和綴 14丁	縦27.0 横20.2	表紙「明治十四年巳一月吉日 日誌 藤尾陶器製造場 沈壽官」
42	日記帳(明治18年1月1日～8月9日)	沈壽官		明治18年	1885	和綴 35丁	縦27.5 横20.5	表紙「明治十八年乙酉第壹月二日改日記帳 玉光山陶器製造場 沈壽官」

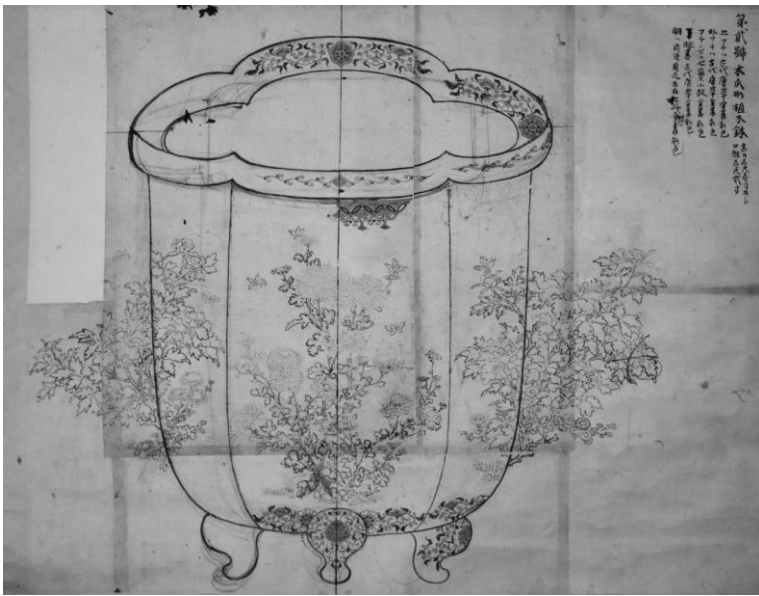
番号	名称	宛所	制作者	年代	西暦	形質	法量(cm)	備考
43	日記 (明治25年1月1日～12月31日)		沈壽官	明治25年	1892	和綴 57丁	縦27.5 横20.0	表紙「明治廿五年 辰一月より 日記 玉光山陶器製造場 画工預り 沈壽 官」
44	星帳		沈壽官	明治25年	1892	和綴 57丁	縦28.0 横20.5	表紙「明治廿五年一月一日より 星帳 玉光山陶器製造場 沈壽官」
45	日給金前渡帳 (明治23年1月～12月)		沈壽官	明治23年	1890	和綴 69丁	縦27.5 横20.0	表紙「明治二十三年第一月より 日給 金前渡帳 玉光山陶器製造場 沈壽 官」
46	陶器各種値段調		沈壽官	明治20年	1887	和綴 18丁	縦27.0 横20.0	表紙「明治二十年第一月より 陶器各 種値段調 日置郡苗代川百六十五番 戸 沈壽官」, 挟込文書2種
47	金地金泥箔買入本立簿 (1月～12月)		沈壽官	明治27年	1894	和綴 14丁	縦27.0 横20.0	表紙「明治廿七年第一月より 金地 金泥箔買入本立簿 玉光山陶器製 造場 沈壽官」
48	北白川宮殿下(能久親王)・妃殿 下行幸等記録貼交掛幅			明治26年6月16日 明治28年6月22日	1893 1895	掛幅 紙本・墨書	縦162.4 横45.0	
49	皇室へ献上・売渡品製作実績書 上		沈壽官	明治30年頃か	1897	和紙 4枚	縦32.5 横24.2	明治14～30年
50	宮内省御注文延期願留		沈壽官	明治26年5月13日	1893	和綴 6丁	縦27.0 横19.0	①「延期願控」(明治26年5月13日付)、 ②「再延期願控」(明治26年7月20日 付)、③「手塚光栄・長崎省吾宛書簡 控」(明治26年7月23日)、④「延期願 控」(明治31年7月29日)、⑤「記」(明治 31年2月3日)
51	再延期願	調度局長山崎 直胤殿	沈壽官	明治26年7月20日	1893	一紙	縦26.5 横37.3	番号50-②と同じ内容
52	宮内省調度局召喚状	沈壽官	調度局	2月5日		一紙 封筒付	縦19.0 横27.0	
53	宮内省調度局召喚状(担当主任 竹中)	沈壽官	購買掛	9月29日		一紙 封筒付	縦16.0 横20.0	沈壽官(芝区田町四丁目拾八番地 河 野豊壽方)
54	宮内省調査課小川寿雄書簡	沈壽官	調度課	11月5日		一紙 封筒付	縦18.5 横51.5	九鬼帝国博物館総長から注文。沈壽 官(芝区田町四丁目 沈壽誠方)
55	陶器調製書		沈壽官	明治26年3月17日	1893	和綴 3丁	縦27.5 横19.5	「第壹號 植木鉢」、「第貳號 木瓜形 植木鉢」、「第參號 朝口形植木鉢」に ついての調製書
56	土木課召喚状(担当小平)	沈壽官	宮内省内匠寮 土木課	(明治26年)9月29日	1893	一紙	縦27.0 横18.0	植木鉢製造の件につき面談依頼
57	契約書案	内匠寮	沈壽官	明治26年10月18日	1893	和綴 2丁	縦24.4 横16.3	盆栽鉢五対三種の契約書案。端書に 「此ハ不宣敷候者、別紙ヲ差上候」
58	宮内省調度局書簡(担当手塚)	沈壽官	調度局	(明治26年)12月8日	1893	一紙 封筒付	縦19.0 横86.5	沈壽官(芝区田町四丁目拾八番地 河 野豊壽方)
59	御門鑑御下渡願ほか綴	内匠寮	沈壽官	明治27年6月26日 ほか	1894	和綴 3丁	縦26.2 横17.7	①「御門鑑御下渡願草稿」(明治27年6 月20日)、②「御門鑑御下渡願案」(明 治27年6月26日)、③「御口入願」(明治 27年6月19日)
60	宮内省内匠寮土木課召喚状(担 当小平)	沈壽官	宮内省内匠寮 土木課	明治27年6月21日	1894	一紙 封筒付	縦17.7 横28.0	沈壽官(芝区田町四丁目拾八番地 河 野豊壽方)
61	宮内省内蔵寮通達	沈壽官	(書類)内蔵寮	明治27年7月19日	1894	一紙 封筒付	縦26.5 横19.5	調度局の送金。沈壽官(本郷区春木町 二丁目廿四番地 三谷治方)
62	代人死亡御届草稿	内匠寮	沈壽官	明治29年4月13日	1896	和綴 2丁	縦25.0 横16.8	内匠寮から注文に対する手続き代人 に指定していた河野豊壽の死亡届
63	解雇御届案		沈壽官	明治29年4月13日	1896	一紙	縦24.2 横16.0	内匠寮から注文に対する手続き代人 に指定していた河野豊壽の死亡届
64	委任状		沈壽官	明治29年4月16日	1896	一紙	縦23.8 横16.0	河野豊壽死亡を受け、代理人岩元玄 静
65	委任状草稿及び見本	宮内寮	沈壽官	(明治29年4月)	1896	和綴 2丁	①縦24.2 横16.0	河野豊壽死亡を受け、代理人岩元玄 静、②縦17.2 横22.5
66	薩摩焼浮彫花瓶製作代金申出書 (断片)	調度局	沈壽官	明治30年12月23日	1897	一紙	縦24.1 横16.2	「薩摩焼浮彫花瓶一個代金二拾八円 五拾銭」
67	薩摩陶器由来・陶器製造場創業 沿革草稿		沈壽官	明治17年8月	1884	和綴 2丁	縦27.0 横19.0	
68	薩摩陶器由来・陶器製造場創業 沿革草稿		沈壽官	明治17年9月	1884	和綴 3丁	縦27.2 横19.0	
69	沈壽官履歴書		沈壽官	明治31年頃か	1898	和綴 21丁	縦27.5 横19.5	「十二」貼付ラベル
70	沈壽官履歴書		沈壽官	明治32年1月10日	1899	和綴 9丁	縦28.5 横20.2	「十七」貼付ラベル、 ※9丁(表紙・裏表紙除く)
71	沈壽官履歴書		沈壽官	明治35年	1902	和綴 2丁	縦28.0 横20.0	「十八」貼付ラベル
72	沈壽官履歴書		沈壽官	明治36年7月	1903	和綴 5丁	縦28.0 横19.5	「十九」貼付ラベル
73	履歴 正		沈壽官	明治36年3月	1903	一紙	縦24.3 横30.0	「二」貼付ラベル
74	沈壽官履歴及び薩摩陶器ノ由来 草稿					和綴 4丁	縦25.0 横17.3	「六」貼付ラベル
75	御仕建松山根帳		肥前傳焼物所	嘉永3年	1850	和綴 8丁	縦29.0 横21.0	表紙「嘉永三年戊二月改 御仕建松山 根帳 苗代川肥前傳焼物所」
76	苗代川肥前傳焼物所部一山目録 写		検者方	慶長元年	1865	和綴 5丁	縦40.0 横14.6	表紙「慶應元年丑六月踏付改 苗代川 肥前傳焼物所部一山目録写 市来 所々山床八ヶ所 検者方」



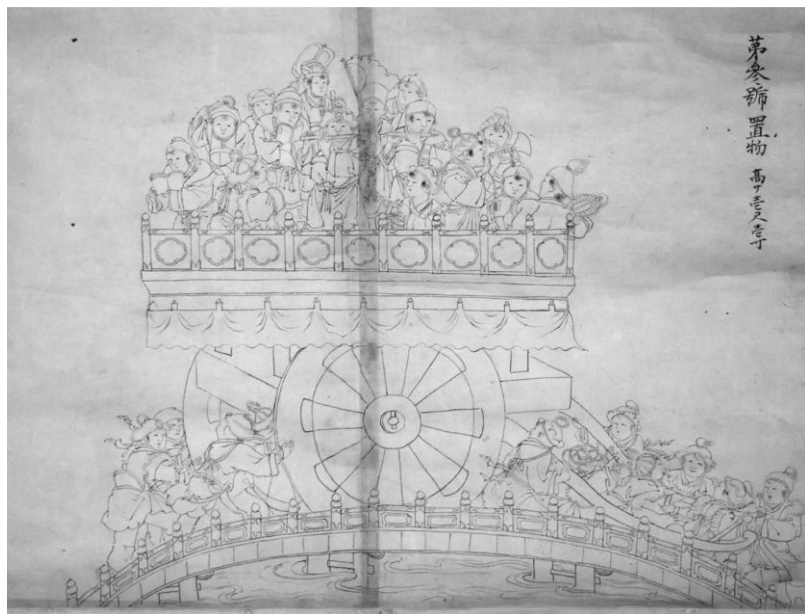
1 牡丹文大花瓶下絵図



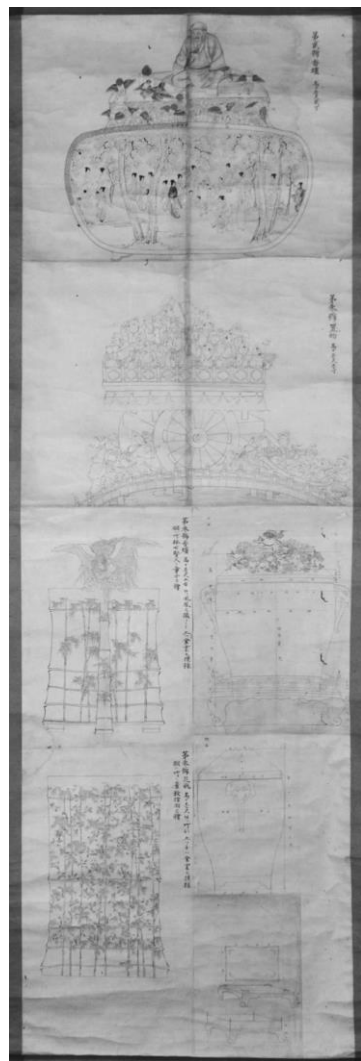
2 朝顔形植木鉢・木瓜形植木鉢・盆栽鉢下絵図



3 植木鉢下絵図



第參節 置物 高十寸五分



第參節 花瓶 高十寸五分 竹形上 下 全雲 樣樣
脚竹 兼 教 習 之 物

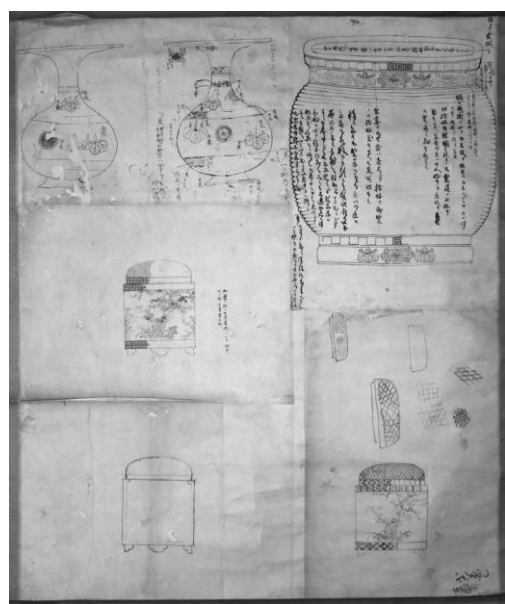


第參節 香爐 高十寸五分 竹 鳳 樣 上 下 全雲 樣樣
脚竹 林 七 賢 人 童 子 禮

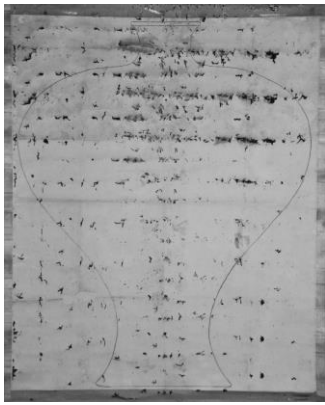
4 香炉·置物·花瓶下絵図



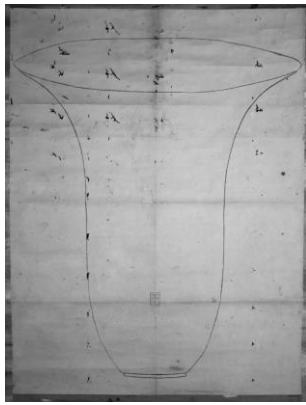
此 瓶 上 下 全雲 樣樣
竹 樣 全 雲 樣樣



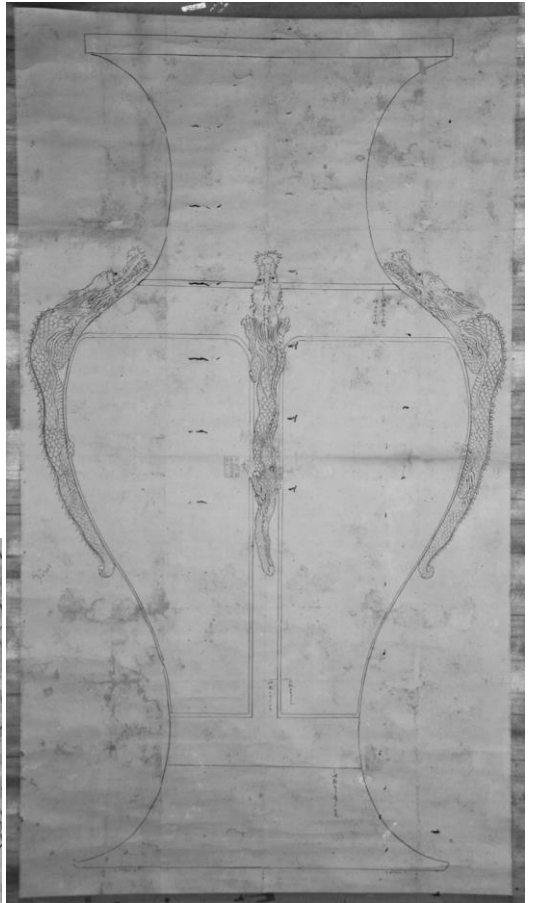
5 瓶掛·花瓶·香炉下絵図



8 瓶子形大花瓶下絵図



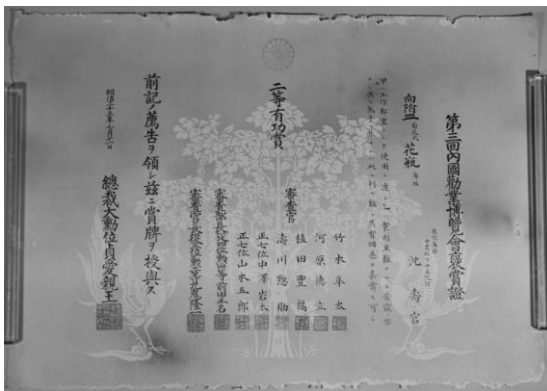
7 広口大花瓶下絵図



6 龍耳大花瓶下絵図



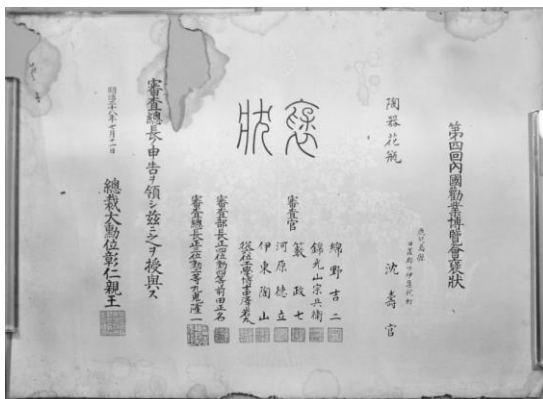
9 菊紋旭日鶴図花瓶下絵図



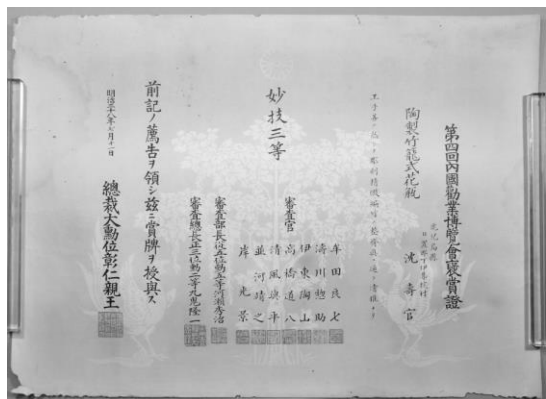
12 第三回内国勸業博覧会褒賞証



10 第二回内国勸業博覧会褒状



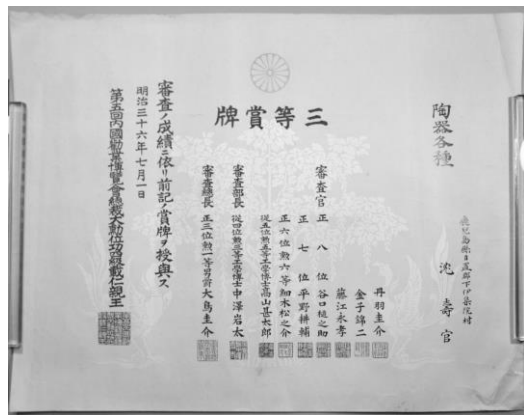
15 第四回内国勸業博覧会褒状



14 第四回内国勸業博覧会褒賞証



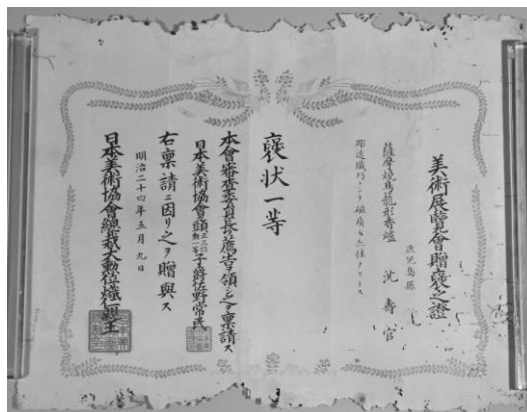
11 繭絲織物陶漆器共進会褒賞授与証



30 第五回内国勸業博覧会賞牌授与証



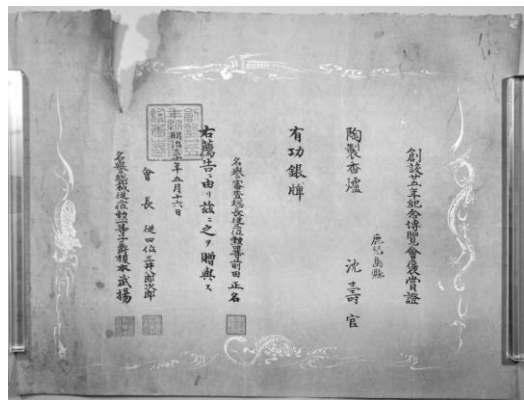
16 連合共進会褒賞授与証



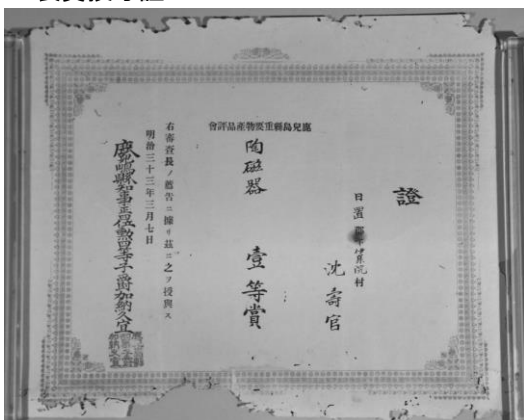
13 美術展覧会贈褒之証



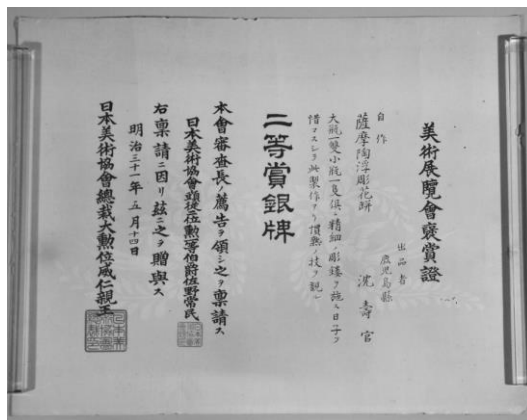
19 第一回鹿児島県管内米外八品品評会褒賞授与証



17 創設廿五年紀念博覧会褒賞証



21 鹿児島県重要物産品評会証



20 美術展覧会褒賞証



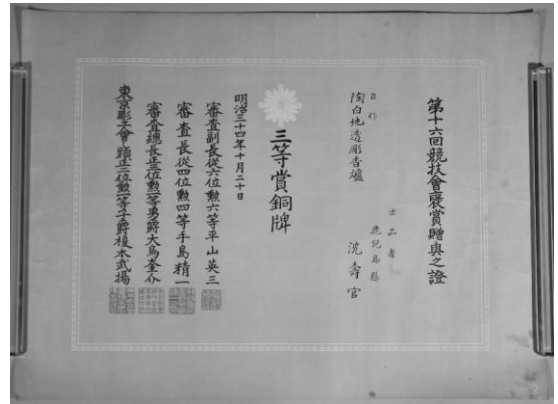
23 第一回全国茶業品共進会褒賞



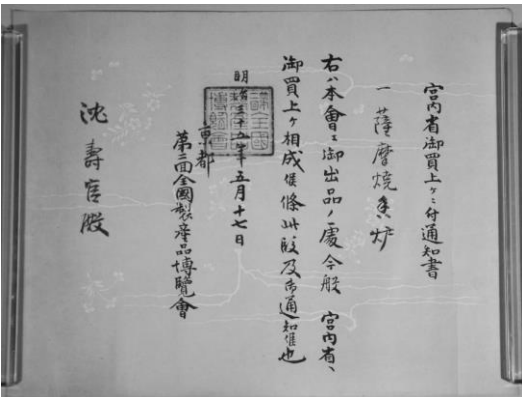
22 連合共進会褒賞授与証



25 五二会臨時品評会褒賞証



24 第十六回競技会褒賞贈与之証



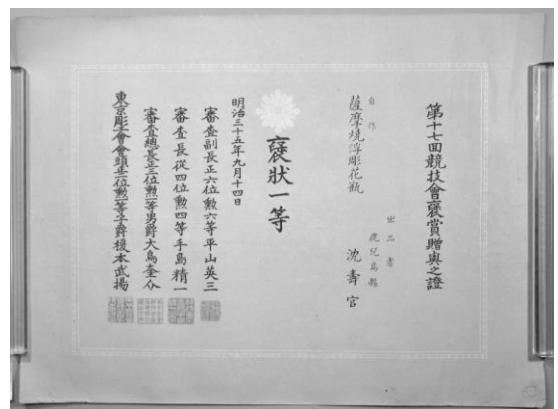
27 宮内省御買上ケニ付通知書



26 第二回全国製産品博覧会謝状



29 美術展覧会褒賞証



28 第十七回競技会褒賞贈与之証



32 内国製産品評会賞牌授与証



31 第三回全国製産品博覧会褒賞之証



34 戦時記念博覧会褒賞之証



33 戦時記念五二会品評会褒賞之証



36 第四回鹿兒島県工産品品評会褒賞授与証



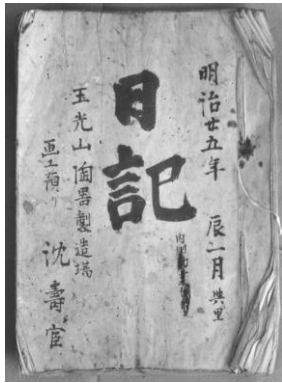
35 第十二回九州沖縄八県連合共進会賞牌授与証



38 第五回鹿兒島県工産品品評会褒賞授与証



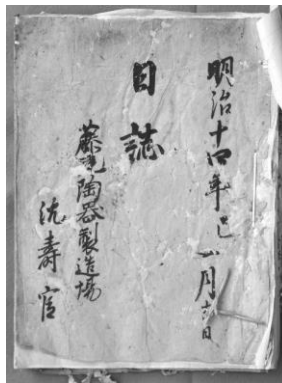
37 平和記念東京博覧会褒賞授与証



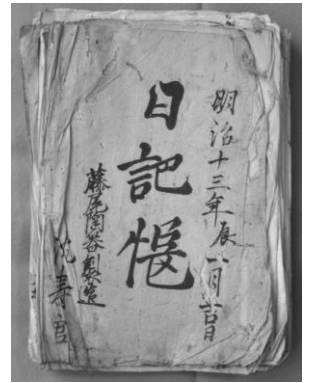
43 日記(明治25年)



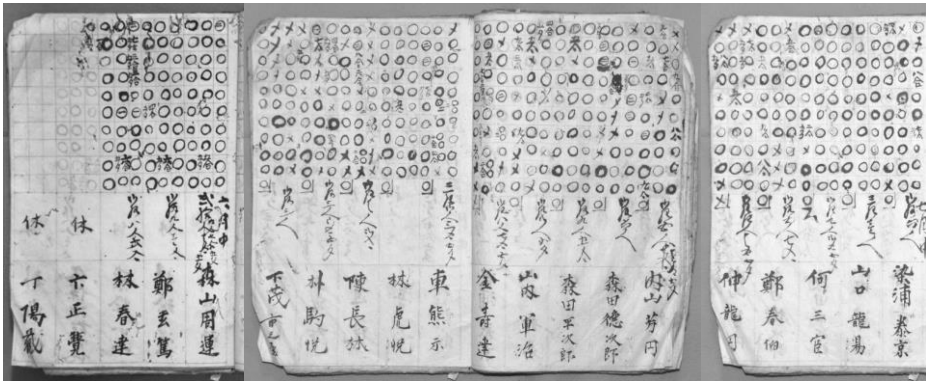
42 日記帳(明治18年)



41 日誌(明治14年)



40 日記帳(明治13年)

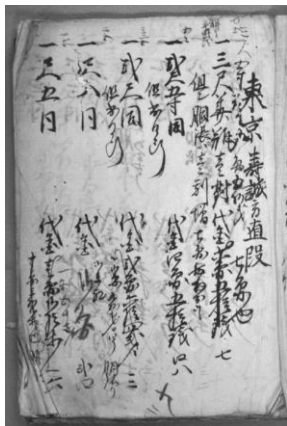


(画工方)

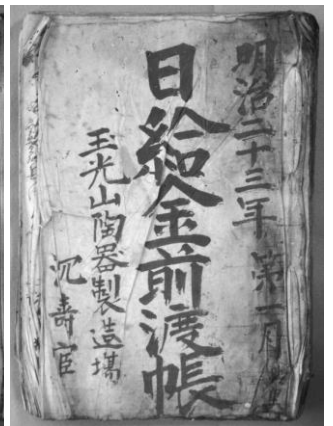
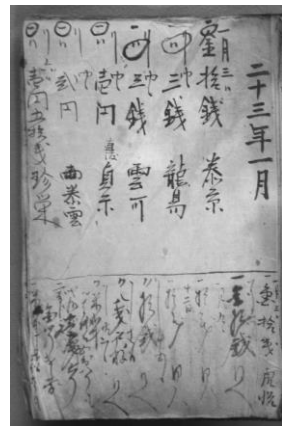


(細工方)

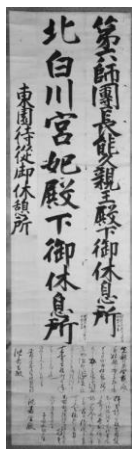
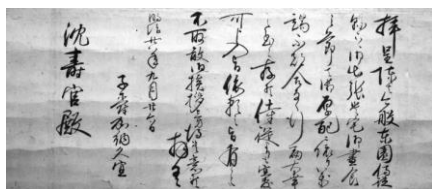
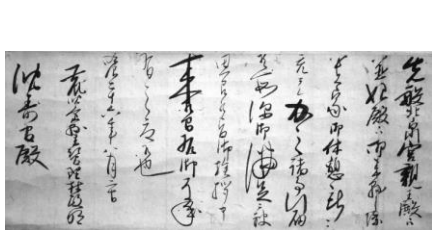
44 星帳(明治25年)



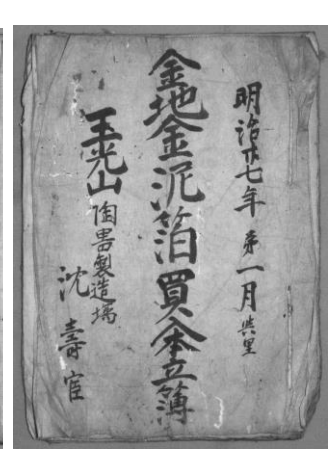
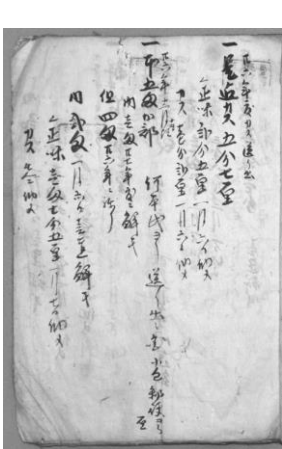
46 陶器各種値段調(明治20年)



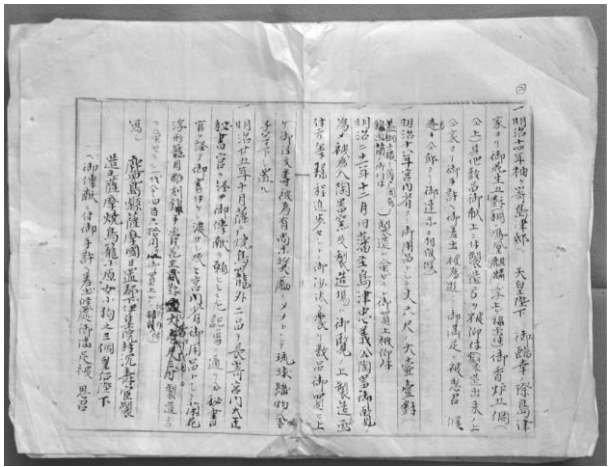
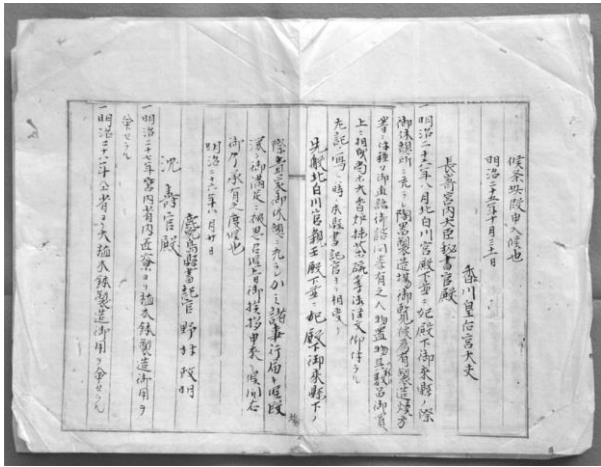
45 日給金前渡帳(明治23年)



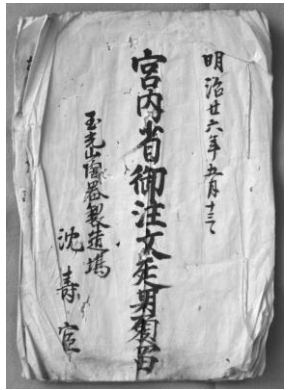
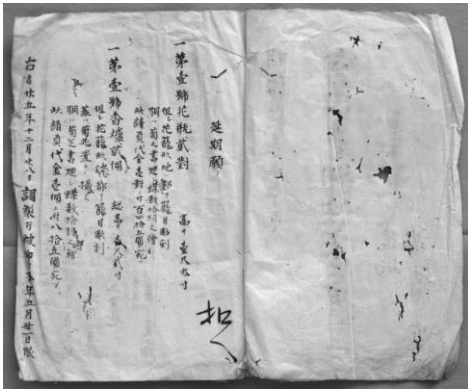
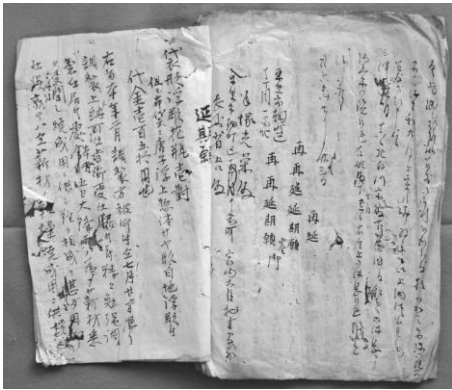
48 北白川宮殿下(能久親王)・妃殿下行幸等記録
貼交掛幅



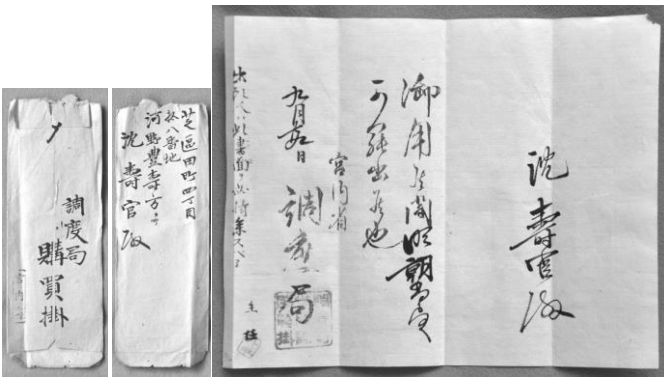
47 金地金泥箔買入本立簿(明治27年)



49 皇室へ献上・壳渡品製作実績書上

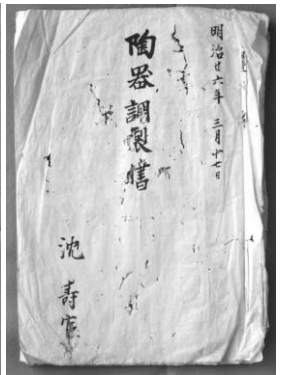
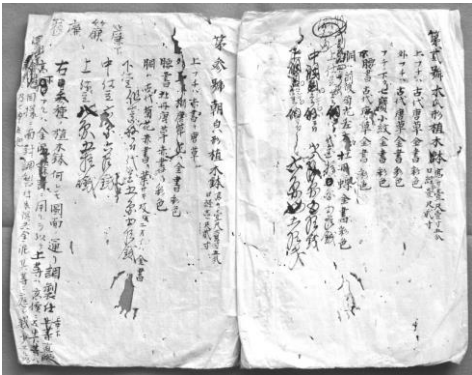


50 宮内省御注文延期願留

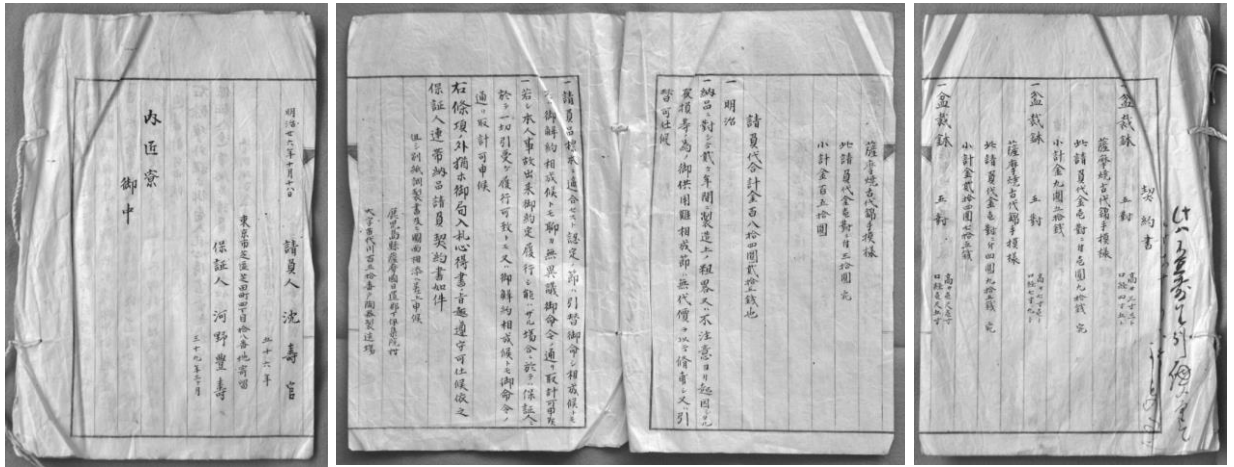


53 宮内省調度局召喚状(担当主任竹中)

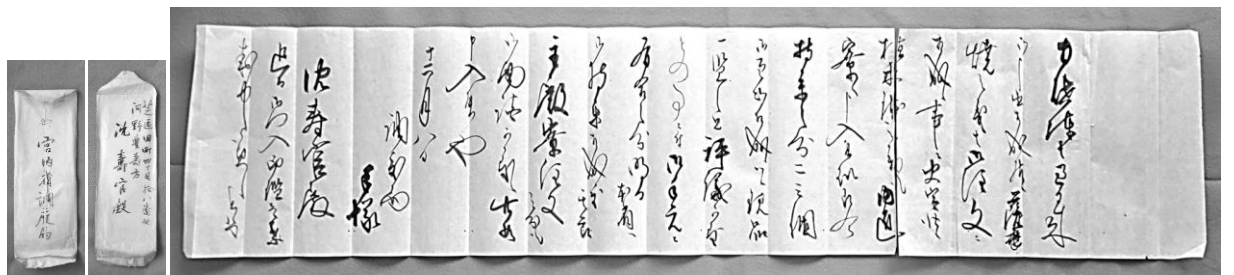
51 再延期願



55 陶器調製書



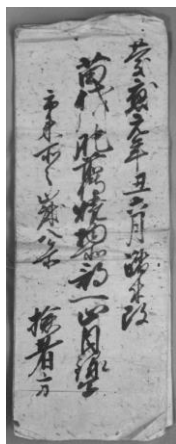
57 契約書案



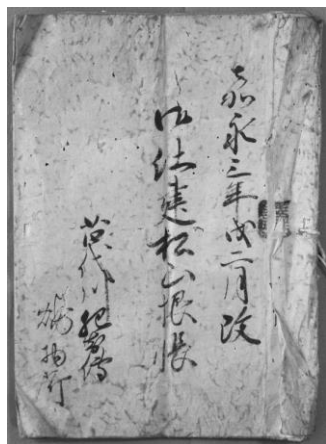
58 宮内省調度局書簡(担当手塚)



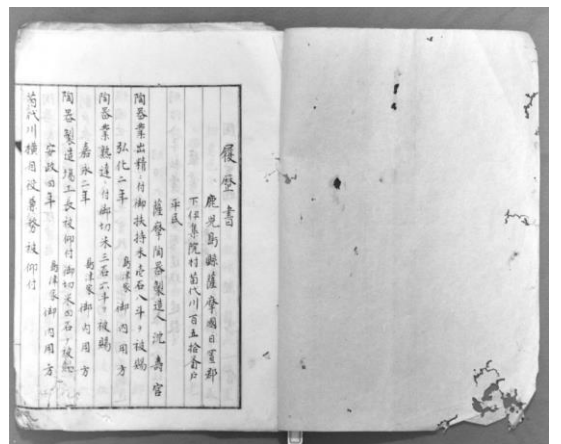
72 沈壽官履歷書



76 苗代川肥前傳焼物所部一山目録写



75 御仕建松山根帳



70 沈壽官履歷書